

# 令和5年度 研究概要

B2グループ

## どのように問題を解決したかを表現することができる児童の育成

㊟ 大坪小 松尾 徳人      大和小 田中 優輔      橘小 楠見 圭悟

### 1 研究のねらい

私たちは、どのように問題を解決したかを表現することができる児童を育てたい。どのように問題を解決したかを表現することができる児童とは、解決に至った考えを明確にして、解決方法を他者に伝えたり、記述したりすることができる児童のことである。

しかし、問題を提示した際に最初から問題に取り組もうとしなかったり、問題解決はできても、どのように解いたのかを尋ねると、考えを説明できなかつたりする児童の姿が見られる。これは、導入の場面で「〇〇を考えてみたい」という意欲を高めることができないことや、何となく解決を進めるだけで、解決に至った考えにまで目を向けさせることができていないことに原因があると考えられる。このことから、児童の「考えたい」という意欲を引き出したり、解決の過程において、解決に至った考えに気付かせたりする指導を工夫する必要があると考えた。

そこで、本グループでは、解決に向けて児童が考えたいくなるような手立てと、解決に至った考えに気付くことができるような手立てを講じる。これらの二つの手立てを工夫することで、本研究の目指す児童の育成に迫っていききたい。

### 2 研究の内容

具体的な手立て

#### **手立て① 問題提示の工夫**

児童の日常生活と関わる要素を含んだ問題や、ゲーム性のある問題を提示する。その際に、「どうなるのだろう」「何で」という問いを児童に生ませるようにする。そうすることで、児童の「考えたい」という意欲を引き出すことができるようにする。

#### **手立て② 大切な考え方に気付かせるための工夫**

問題解決の後に解決方法を問い掛け、児童から引き出した言葉を色チョークで強調したり、囲ったりして視覚的に分かりやすくする。その後、「黒板のどこに大切なことが書かれているか」と発問し、何が解決につながったかを全体で共有できるようにする。このように板書や発問を工夫することで、本時の問題解決に至った考えに気付くことができるようにする。